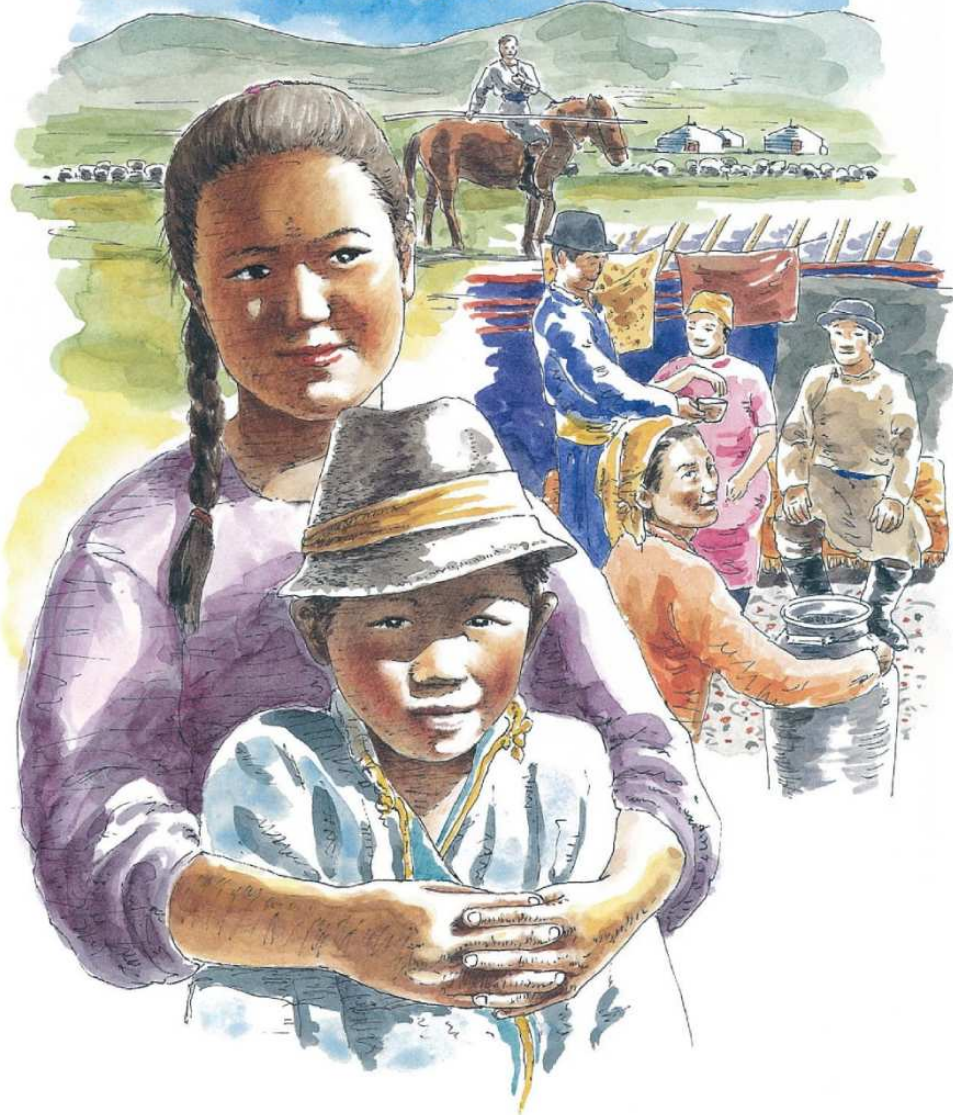


SOWER

ソア=種まく人
No.16
March. 2000
財団法人
日本聖書協会

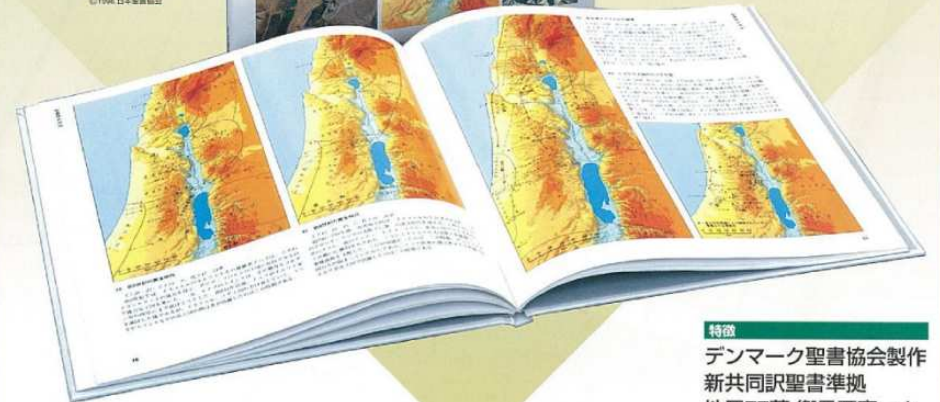
特集 東京大聖書展
21世紀のキリスト教会の礎を築く



2000年は、 聖書全巻通読を。



好評
発売中
!



特徴
デンマーク聖書協会製作
新共同訳聖書準拠
地図77葉 衛星写真つき
多色刷り

書名
バイブルアトラス/聖書地図

サイズ
235×255mm
装丁
厚表紙 64ページ
本体価格1,900円

●ご注文は近所近くのキリスト教書店、または全国の書店へ
「聖書協会」の注文欄へ
●カタログ請求、お問い合わせは6時まで

財団法人
日本聖書協会
Japan Bible Society

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
TEL 03-3567-1987 (ダイヤルイン)
FAX 03-3567-4436
ホームページ <http://www.bible.or.jp>

東京大聖書展

会場 有楽町そごう 会期 2000年11月2日～11月19日 (予定)

SOWER
ソア No.16

2000年3月1日発行
[3月・9月の年2回発行]

発行・財団法人日本聖書協会
〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3567-1980 振替 00160-2-18410

ホームページ
<http://www.bible.or.jp>

この雑誌は
エコマーク認定の
再生紙を
使用しています



エフライムの村

ラザロを生き返らせたイエスの評判を恐れた最高法院は、イエスを殺す計画を立てた。そのため「イエスはそこを去り、荒野に近い地方のエフライムという町に行き、弟子たちとそこに滞在された」とヨハネ伝に記されています。このエフライムはエルサレムから北北東に直線距離で二十キロにあるタイベであると伝えられています。ユダの荒野に接する標高八百メートルを越える高地にあり、キリスト教徒の村として古くから知られています。家々の庭や畑に植えられたアーモンドの花が咲く二月頃は、最も美しいはずまいを見せてくれます。村の高台には教会の尖塔がそびえ、オリーブ畑が村を取り囲む静謐の地です。イエスが受難を目前にしてご生涯の使命を深く瞑想して過ごされたのも、ちょうどこの季節でした。のちにエルサレムで迫害された初代教会の信徒たちも、この村に逃れて来たと言われています。

巻頭 三十八による福音書第十一章五十四節

巻頭聖句

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。

(フィリピの信徒への手紙2章6、7節)

キリストのご受難、ご死去について考えている四旬節にある今、この言葉は私たちにとって深い意味があると思います。この言葉に続いて、「へりくだって、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順でした」という言葉も出てきます。この言葉はイザヤ書53：12のヤーウェの僕についての言葉、「彼は自らをなげうち、死んだ」を反映しています（使徒言行録8：28-35も参照）。パウロは上に挙げた言葉を導入として、フィリピの人々にこう書いています。「互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにも見られるものです。」ところで、イザヤ書とパウロの手紙には次のようなことも書いてあります。すなわちイザヤ52：13には、「見よ、わたしの僕は栄える。はるかに高く上げられ、あがめられる。」またフィリピ2：11には、「すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです。」今、私たちは日々の生活の苦しみの中で、へりくだって死に至るまで従順であったイエスに倣い、同じようにご復活の主イエスの新しい栄えある命に与ることを、パウロと共に（フィリピ3：10-11、14、21参照）期待いたしましょう。

B. シュナイダー

フランススコ会聖書研究所所長

CONTENTS

Sower
No.16
2000

2 座談会 東京大聖書展

特集

21世紀のキリスト教会の礎を築く
森一弘・峯野龍弘・池田裕・妹尾正毅・渡部信

11 ゲーテンベルク四二行聖書と
EUMIプロジェクト 高宮利行

12 台湾震災リポート

14 物語の神学の可能性
東方敬信

15 Eメール 渡部信

16 エッセー⑥
小笹和彦「へななちゃんの手紙」
人物と聖書

18 田中正造の聖書 鈴木範久

20 読者の声より

21 聖書図書館蔵書シリーズ⑩
「ニコライ訳」



表紙の言葉

モンゴルの遊牧民
移動式の家「ゲル」に住み、
四季によって草原を家畜と
ともに（馬・羊・ラクダ）
移動します。冬・春は肉を、
夏・秋は乳製品を主食とし、
少ない道具で全てを行うシ
ンプルな生活です。国民の
6割以上が35歳以下です。
（月本佳代美）

東京大聖書展

21世紀のキリスト教会の礎を築く

今秋、東京大聖書展が有楽町そごうで開催されます。キリスト降誕2000年の本年は、聖書普及活動が日本で開始されて125年の記念の年でもあります。この記念すべき聖書展に「死海写本」を日本へ持ち込みたい——この壮大な幻が実現しようとしています。本邦初公開の夢を叶えるため、昨年11月にイスラエルはエルサレムにあるロックフェラー考古学博物館を訪問した、5名の方々に語っていただきました。

(2000年1月5日 於・日本聖書協会会議室)



出席者

司会

森 一弘 氏

●東京大聖書展実行委員長
●カトリック東京大司教区
補佐司教

峯野龍弘 氏

●東京大聖書展実行委員長
●ウエスレアン・ホーリネス
教会連合定稿教会 主曹牧師

池田 裕 氏

●東京大聖書展顧問
●筑波大学歴史・人類学系
教授

妹尾正毅 氏

●東京大聖書展顧問
●元駐ベルギー、駐ノルウェー
大使

渡部 信

●日本聖書協会 総主事

司会 キリスト降誕二〇〇〇年を記念いたしまして、「東京大聖書展」が十一月に持たれようとしております。聖書展は過去二十四回開催されてきました。特に二〇〇〇年は東京で開くことができるといふ願いを持っておりました。この願いが神様の御旨によって、また東京の諸教会の皆様のお力によって、このたび実現していく運びとなりましたけれども、その「聖書展」の意義についてしばらく欲談の時を持ちまして、更にこのために折りを熟くして準備してゆきたいと願っております。まず自己紹介を兼ねまして、聖書展に寄せる期待や思いを述べていただければと思います。最初に森実行委員長、よろしくお願ひします。

森 カトリック教会はこの二〇〇〇年には、教区としては聖書展をやりたいと思っております。それを聖書協会にお願いして、超教派でやるなら喜んで協力して下さるということ。カトリック教会としてはこういう聖書展というのは望んでいたことなので、たいへん嬉しく思っております。

峯野 このたびは実務委員長という名前をいただいで、たいへん恐れ戦いておるわけですが、わたし共はJEA（日本福音同盟）というプロテスタント教会の中の一つの団体に属しております。そのJEA系列で二〇〇〇年のいろんなイベントを考えておりました。そういう中で、「聖書展」を催されるということをお願い、それならば私たちもお加えいただき、

何かできることをさせていただければと思っております。こういう役割を仰せつかることになりました。目的が遂げられるといいなと思っております。

司会 ありがとうございます。池田顧問、ひとことお願いします。

池田 私は筑波大学で歴史・人類学系に属しております。普段はオリエンタル史と旧約聖書の授業などを担当しております。国立大学で「旧約聖書」という授業科目がある所はあまり多くはないのではないかと思います。また、私は三十年ほど前から聖書協会の「聖書図書館」に、いろいろな形で関わらせていただけてきました。コンパクトですが、非常に充実した聖書図書館です。そして、これまでの地道な図書館活動のちよと大きな節目になる時期に、この死海写本を中心とする「聖書展」が開催されるというふうには私が見ておりまして、それも不思議な導きだと思っております。

司会 妹尾顧問、いかがでしょうか。

妹尾 私は、もともとは外務省にいた信徒というところで、何かお役に立つことがあればとご紹介をさせていただいてご相談に乗らせていただいたりしていただけてございます。外務省時代には、ある時はベルギー大使をしておりまして、「日本人の移住九十周年」という大きな行事がありまして、カテドラルで当時のベルギーの枢機卿の大きな感謝ミサがありました。ローマにおります時はパチカンでローマ法王

に特別謁見していただいたり。それから、ノールウェーで大使をしていた時は私のいる間に、PLOですね、パレスチナ解放戦線の間の基本和平合意というものが出来たりしまして、いろんな意味でここで取り上げられている問題、世界の恩恵に浴してきたと思っております。何かお役に立つことがあれば何でも思っております。ついにイスラエルまで一緒するということになったわけでございます。

司会 ありがとうございます。日本聖書協会では、聖書普及活動の一環として聖書展をずっと協賛してまいりましたけれども、カトリック教会もそのようなものを考えておられたということですが、その動機はどのようなものだったのでしょうか。

森 一つは、世紀の変わり目ということで、全世界のカトリック教会に世紀の変わり目にきちんと対応していこうというように呼びかけがありました。特に私たちの信仰の原点である聖書がこの新しい世紀に対してどういう光を放つかというところを明確にし、それを日本の社会に呼びかけられるような形をとればよいなというような気持ちがあったわけですね。二十一世紀のビジョンを探ろうという動きと重なって、その二十一世紀を照らす、闇を照らす、あるいは歩みを照らす光として聖書を位置づけ、その流れの中で、聖書を意義づけよう。というのがカトリックの考え方だったんです。特に今、日本の社

特集

東京大聖書展 21世紀のキリスト教会の礎を築く

いう二つの柱を決めました。その中で一つ目玉になるのが死海写本。その死海写本を日本に持ってくれば、たしかに多くの人に足を運んでもらう一つの動機になるだろう——というので池田先生と妹尾さんにご足労、ご協力をお願いして、それが実現できるように頑張らね。それはとても有り難いことだなと思っております。この死海写本がなかったら、どれだけの動員力があるかなというのが一方ではありますから。

司会 死海写本については、池田先生のお立場からいうと、ただ古いということだけではなくて、展示する価値としてはどういふものがあるのでしょうか。

池田 死海写本は何ととっても聖書のテキスト研究にとって大事な宝です。死海写本が一九四七年にエルサレムの東、約三十キロの、いわゆる死海沿岸の洞窟で発見されるまでは、いわゆる「旧約聖書」と私たちが呼んでおります聖書で一番古いテキストが十世紀のものでした。ですから、イエス・キリストの時代からしますと千年経ったところのテキストが



会というのが経済を中心にして発展してきたという状況がある。そして、多くの人々が閉塞状況にある。そういう中で、私たちの信仰の原点である聖書を、現代の社会を照らす光として現代人に紹介したい。そういう思いがあります。

司会 日本聖書協会も、この二〇〇〇年は聖書普及活動開始一二五年ということで記念聖書展を考えておりました。具体的には今回の「大聖書展」はいろんな教派のご協力をいただくということで、その準備のために時間をとったわけですけれども、実務委員長として峯野先生は、いろいろとご苦労があったのではないかと思います。開催準備状況についてご報告いただければと思いますけれど、いかがでしょうか。

峯野 そうですね。数年前からこういう伝道を二〇〇〇年にということが、今のお話のような経緯のなかで立ち上がってきたわけですから、具体的に表に見えては、総主事が今おっしゃられたように、日本のキリスト教界がカトリック教会もプロテスタント



教会も含めまして皆が一つになって、こういうイベントを実施するという話が煮詰まっても、実際に稼働したのが一年ちょっと前ぐらいと考えてもいいと思うんですね。そこで聖書展の時期というものが二〇〇〇年の秋ということですから、非常に短い期間で立ち上げをしていかなきゃならないということが、大きな、もう初めからの困難さというものをそこに背負っていたわけです。しかしながら、これは神様の祝福の中で、多くの人々の期待を受けながら、しかもその方々が一つになってこれから総力を挙げて行くならば、きつと見事な花が開き、そして実を結ぶだろうと思っております。で、そういう中で最大のヤマがありました。それはですね、出展物の中心になる死海写本というものが果たしてイスラエルから貸し出していただけて、現実に日本に来るかどうかという、大きな課題でした。

本日ここにおります者たちは、そのため皆



手にするものとして一番古かったのですけれども、死海写本の発見によって、それが更に千年、あるいはひよっとするとそれ以上のテキストが、私たちの手にじかに触れることができるようになったということで、決定的な出来事でありませう。従って、今世紀、二十世紀における「発見」の中で最大のものと言われるゆえんです。そこには「イザヤ書」の巻物のようにほとんど完全な形で出てきたものから、断片になっているもの、あるいは注釈書があったりと、様々なものがあります。それらを全部を含めて「死海写本」と呼びます。そこに共通する重要なことは、今から二〇〇〇年前の人たちが聖書を書きで書き写し、学んでいたことです。しかも死海写本の発見された場所というのは、当時の大都会エルサレムからずっと離れた荒野にあります。荒野の中で生活していた人たちが、それを書き写したということですね。なぜそうしたのかは、いろいろ理由があると思うんですけど、ともかくここでは気持ちを集めて、雑念から解放されて聖書の勉強に打ち込んだというところ、それが一つの重要なポイントだと



で現地まで出張って行ったんです。言ってみれば戦友みたいな仲間であるわけですけれども、幸いに外務省筋のご支援やご理解、あるいはまたイスラエルのほうのご協力、ご理解、そういうものがありまして、それがクリアされたということですので、私たちはホッと胸をなでおろしたわけです。

司会 この「聖書展」の展示物を決める過程で、森実行委員長はどんな構想をお持ちだったのでしょうか。

森 準備段階で有志の先生方が超教派で集まっていた時に、単に聖書にはいろんな翻訳があったとか、いろんな歴史的背景があったというだけではなくて、生きた人間の心に訴えたいという思いが表に出てまいりました。そういう話の中から二つの柱が出てきました。一つは「聖書がどのように伝えられてきたか」、目玉としては死海写本、それからグーテンベルクの聖書——というような聖書の伝承の過程。そしてもう一つは、現代の人たちにきちんと聖書を伝えられるようにというので、「聖書を生きた人たち」、特に二十世紀に聖書の光のもとに生きた人たちというので、人物を取り上げよう、と。で、マザー・テレサとか、シャガールとか、ヘレン・ケラーとか。それぞれの状況の中で聖書というものを背景にして時代を生きて、その足跡が多くの人の心に訴える生き方ができた人たち。その二つを取り上げれば「聖書展」が生きたものになるだろうというので、「人」と「聖書」と



思うのです。そういうものに、写真もいいんですけども、たとえ一部でも本物に触れることは、日本の人々にとてもおそろく大きな刺激になるのではないのでしょうか。その美しさ、本物から受ける無言のインパクトと言いましようか、それは期待してよろしいかと思っております。

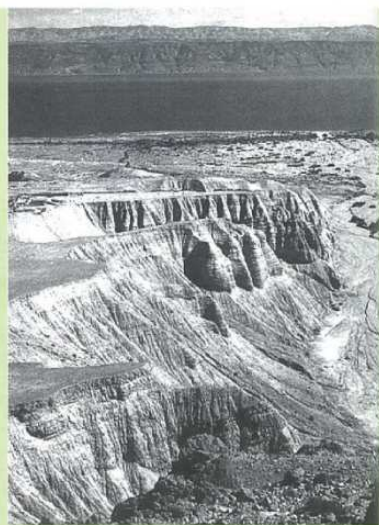
司会 私は死海写本を展示するというお話を聞いたときに、まあ、「ほんとに実現可能なのか」と首をかしげたくなるような感じでしたが、それが、現実となりつつありますので、驚きです。これは大変難しいことだったので、驚きです。これは大変難しいことだったので、驚きです。これは大変難しいことだったので、驚きです。

妹尾 そうですね。ざっくばらんに申し上げますと、実はこのお話が最初ありました時に、私はイスラエルの担当官に、「君、どう思うか」と聞いてみたんですね。「まず、不可能じゃないですか」と言われましてね。まあ、

「よく言って、極めて難しいと思います」ということだったんですね。では、何としようというところで、外務省の当時の事務次官、今の駐米大使を実行委員会の皆様と一緒にご一緒訪問し、外務省に説明すると同時に外務省の意見を聞き、協力を仰がれることを皆様にごアドバイスし、私はアレنجジさせていたいたわのですが、非常に良かったと思います。特に、これはやはり広い意味で、何て言うんでしょうか、人間の知恵でもあり文化でもある死海文書を日本に持つてくることのできるということとは、外務省の立場からみても、「それは結構なことだ」と。実は駐日イスラエル大使は、私は前からよく知っていたんですが、外務省の外務次官のほうからですね、イスラエル大使館にご協力をいただくようにお願いしてもらっています。で、駐日イスラエル大使も非常に前向きに取り上げてもらったということですね。そしてイスラエルに皆様と一緒にいった時には、先方はすでにそのつもりになっておられて、今お話がありましたとおりにですね、「これから先はこちらの問題」というところまで来ましたし。

司会 ありがとうございます。さて、池田先生、死海写本といいますが、どのくらいの数があるんでしょうか。

池田 一番メインの、例えば、一九四七年に発見された時の「イザヤ書」の大きな巻物。それから「宗規要覧」という共同体の生活の規則を記したんですね。それからもう一つ



クムラン遺跡——後方に死海を望む

んかにも行ったことありますけども、それは全部、現代なんです。それが今度イスラエルに行つて、ほんとの聖書の世界：それは現在、建物がいっぱいありますけども、聖書の土台はここにあるという、大変な強い印象と言いますか、感動を覚えました。そういう意味で、できるだけこれからもたくさんの方にイスラエルに行つていただきたい、と。きつと報われるところが大きいことではないかと。

司会 峯野先生、いかがでしたか。もう一回も行かれましたか。

峯野 ええ、イスラエルは七回目なんですけれども、いつもいっしょにわゆるキリスト教会の聖地ツアーの引率者として行くんですね。そうすると、その一つ一つのものについて深く自分が考えるというよりも、一緒に行ったツアーの人たちがいかにエンジョイしてくださるか、無事に帰ってきてくれるかということにほと

は、「ハバクク書」の注解書。そういう大きなものが三つあります。死海写本が発見された動機というのは、遊牧民がたまたま、自分の羊が山羊を捜しに行つたら、洞穴があつて中に石を投げたら、カチンと音がした。何だろうと思つて中に入ると土器が見つかり、中に羊皮紙の巻物があつた。有名なエピソードです。巻物の価値が次第に分かってきますと、学者も遊牧民も競つて、その周辺の洞窟を探しまわつたんですね。最終的に軍配が上がつたのは遊牧民のほうだったようですね。でも内容はよく分からないが、でも「価値があるらしい」ということが分かつた遊牧民たちは、出てきた写本を細かく切つて、一片一ドルか二ドルで売ろうとしたわけです。これが悲劇の始まりなんです。結果的に学者たちは、ジグソーパズルよりもっと大変な作業を強いられることになりました。おそらく合計一五〇千ぐらいの断片になってしまったものを時間をかけて買い集めたわけです。現在それは私たちが訪問しましたロククフェラー博物館、あそこに全部集められて、国際的な共同チームが断片合わせの大変な作業を行つてきておられます。だいたい五百ぐらいの文書がそろつてバラバラになってしまつたのではないかとされています。徐々に刊行されていますので、これからさらに研究が進んで行くでしょうが、今までの学者たちの苦勞はほんとに大変だと思えます。

司会 今回、本日出席していただいた四人の

んど頭を使っていることが多いんですね。このたび、こういう特別な目的も持つて行きました時に、改めてクムランにも参りましたし、そしてロククフェラーのあの博物館、あの地下の中ですね、なんと二〇〇〇年、三〇〇〇年前のこうした貴重な宝物というか、考古学的な価値ある資料がですね、「眠っている」と言うよりも「生きてる」という事実を目の当たりに触れて、私は非常に大きな感動をおぼえましたね。何か歴史がこう、甦つてきて、そしてそれはまさに、昔も今も変わらぬそのものを見ていた時に、考古学者の方があの地味なはたらきを止められなくなるのは、この感動の故だろうか。などと、一日、二日の考古学者になつたような気持ちになりましたね。まあ、大げさな言い方ですけども、それで私、その時に思ったのはですね、日本の歴史は、その頃、どうだったのだろうか。あの荒野で、彼らが、どんな真摯な思いで、人間の精神的な深いものを、透徹したものを求めながら、写本を書きながら生き、かつ生活していかかと思う時、——そういう生き方の素晴らしさというか、まだ日本の歴史がお胎の中にあつたかと思うか、非常に感動を覚えました。それからいよいよとつ感じたことは、荒野です。その昔、モーセが荒野に羊を追つて行った時、山の上に不思議な「燃えるもの」を見た、いわゆる、燃える柴ですね。彼

先生方と私が現地を越えたいわけですからね、クムラン洞窟に行つたのは良かったですね。やっぱり、死海写本とクムラン洞窟はどろいでも一緒に見ないと、死海写本の意味がはっきりと認識されないんじゃないかなと思います。妹尾顧問、現地で何が一番インパクトが強かつたでしょうか。

妹尾 私は過去に、ヨーロッパとかアメリカとかですね、アジアはだいたい未だ動したり行つたりする機会があつたんですが、中東、とくにイスラエルには行つたことがございまして、今回初めて行つたわけですね。初めてイスラエルに行つて感じたことといえば、やはり国のコントラストと言いますか、例えば北のほうのガリラヤ湖あたり、ほんとに奇麗なんです。びっぴりしました。キリストが主として宣教しておられた地域というのは、こんなに奇麗な所だったのかと。一年じゅう何らかの花が必ず咲いていて、それは灌溉が進んだ結果という点か多少あるかもしれないけれども、現地の専門家の話によると二千年前も同じである、というのだそうです。そうすると、すばらしく奇麗な所なんです。それと、クムランの洞窟とか、その南にあるマサダですね、石ころだらけの荒地ですね、厳しいコントラストというものに非常に印象に残りました。私はむしろヨーロッパとか、現代の世界から教会に入つて行つたもので、すから、パチカンドとか、いろんな大きな教会でクリスマスとかイースターのミサナ

は、その不思議な見ものを見ようとして山奥へ入つて行つて神の臨在に触れたわけですね。死海写本を訪ねて行くわれわれの思いの中にですね、何かモーセがその見ものを見に行つて、そこで彼の将来があやつて変わった、人生が変わり、歴史が変わり、世界が変わつた、ということと同じようなことを感じるので、そういうことを思うと、今度の「大聖書展」が、この死海写本という見ものですね、現代という「荒野」の中で、「東京砂漠」の中で「出展されること」で、皆が、その「見もの」を見に行こう」ということではないでしょうか。感動にあふれ、人々の歴史が変えられ、人生が変えられるようなことが——そこで起こるといいな。そんな展示会になってくれるといいなというふうに思いました。

司会 ああ、それは素晴らしいですね。

峯野 何か燃やされるといふか、エキサイトした気分になってきましたね。

司会 そうですね。さて、具体的にはどんな死海写本を借りることになっていくんでしょうか、池田先生、ご説明いただけますか。

池田 ええ、まだ来てないので、何とかの皮算用(笑) っていうことになるでしょうが、いわゆる「モーセ五書」の中のどれかをということで、それらの断片のサンプルを拝見しました。「創世記」、「出エジプト記」、「レビ記」の中のどれか一つになると思います。それから「詩編」の一部と、「預言者」の中から一

つ。だいたい三つのジャンルの中から幾つかを届けていただければ素晴らしいのだが、と申し上げました。はい。

司会 カトリック教会の「七十人訳聖書」がユダヤ教の使っている聖書より、死海写本に近い訳で書かれたということをちらっとある本で読んだんですけども、今回は死海写本以外に、パチカン所蔵の聖書写本も展示するという点で。この点に關しましては、カトリック教会の森司教様にいろいろとお骨折りをいただきました。どんな写本がお借りできるんでしょうか。

森 パチカンは二〇〇〇年には全世界から人がやってくるので、原則的に貸さないという方針をとっているんですけども、でもまあ、「日本だから何とかしましょう」ということで協力してくれることになりました。パチカンから出てくるものは、基本的には修道院なんかでこつこつと、こつこつと聖書を伝えていった一つの写本ですね。ローマカトリック教会の信仰の、聖書の伝承の足跡を見るところで



死海写本が入っていた壺
(写真の実物を東京大聖書展で展示)

的な大作業をしてきたんですが、それも大変なことです。いつの時代にも、表面的に派手な華やかな部分と、そこからズレた目立たない部分とがありますよね。聖書の翻訳とか伝達というのは、むしろそうした時代からちょっとズレたところについて頑張った人たちの産物でもあるんです。今回の「聖書展」が語る大きなテーマの一つはそこにあると思います。

司会 ああ、なるほどね。

池田 時代の最先端を行くものが必ずしも常に歴史に残るとは限らない。聖書が今日残っているのは、小さな家の隅で、あるいは地方の修道院でこつこつと聖書を写して研究した人たちがいたからです。現在私たちが手にしている聖書資料の中で一番古い死海写本も、これにつながるとも思います。ローマとの戦いがあった時に、ユダヤの人々は「何を遺すのか」を考えました。自分たちは戦争で斃れるかもしれない。では、後に何を遺すかとなって、聖書だけは遺そうと思ったのでしよう。それを土器の壺に入れて、人に目立たない所に隠したわけです。そういうふうな、次の世代に「伝えなくては」という気持ちでそうさせたわけですけども、で、その次の世代というのは結局、二〇〇〇年後のことでした。言ってみれば、二〇〇〇年後の「次の世代」が受けとめたわけです。次の世代という、私たちは自分の子供とか孫くらいを考えていますけども。当時の人もそう思ったかも知れませんが、大事なのは、

味においては意味があるでしょう。

司会 さて、「東京大聖書展」におきましては、国内の出版物についてもいろいろと多方面にわたってご協力いただくことになりました。特に慶應義塾大学所蔵のグーテンベルクの聖書が、本当にご好意によって展示できるようになりました。この点について筆野実務委員長から、ひと言お話しただければと思います。

筆野 これも非常に喜ばしいことでして、世界の歴史の中でもグーテンベルクと云えば、産業革命といえますか、歴史の中でも大きな分岐点で、一つの大きな役割を果たした存在であるわけです。そのグーテンベルクの印刷機で印刷した聖書、ほんとに世界で幾つしかないというふうな、その初版本が慶應義塾大学の所蔵となっていて、それを貸し出してくださるといことは、大変なことでもして多くの方々にご覧見ていただきたいものです。ぜひ楽しみにしていただきたい。と、同時にグーテンベルクの聖書をデジタル化してですね、HUM Iプロジェクトという、非常に素晴らしい技術をもってこの聖書をコンピューターによって映像化したわけです。これはまた、一つの見ものじゃないでしょうか。実際にデモンストレーションをするので、見ていただけたらと思います。

司会 そうしますと、これは展示場と展示物の管理という問題がだいぶ出てきますね。この点は妹尾顧問、いかがですか。どのような二〇〇〇年後の先を見ながら「何を遺すべきなのか、何をすべきか」を考えなければならぬ。そういう意味において、この死海写本が象徴していることは大きな気がします。

何も二〇〇〇年前の死海写本の人たちだけではなくて、実は和訳聖書に関わった人たちも、あるいはドイツのグーテンベルクの印刷技術、あるいはルターの翻訳も、すべて皆同じような状況だったと思うんです。やはり時代としては厳しい状況があった。「何をすべきか」を考えている人たちが、自分の生き方、全人生のエネルギーと情熱を注ぎ込んだ。それを逆に通って行ったところに死海写本があります。そのような学者や研究者たちが日本という、欧米のキリスト教文化から離れた、違う異質の場所で、今後さらに出てきてもいいでしょうし、興味を持つ人が出てきていいでしょうし、作家も出てきてほしい。ことに子供たちが、死海写本などを直接見ることで大人以上のインスピレーションを得て、大きく育って行ってこれれば素晴らしいですね。

司会 なるほどね。

池田 この「聖書展」の仕事の一部に参加させていただいで、一番嬉しいと思っております。二十世紀は振り返ってみれば、戦争がたくさんあったり、争いがあったりしましたから、誰もが、二十一世紀はそうでない世界を、若い世代が中心になって築き上げてもらいたいと望んでいる。共

セキュリティを必要とするのでしょうか。

妹尾 死海写本というのはほとんど国外に出たことのない。「宝」というお話がありましたが、ほんとにイスラエル側から見れば宝だと思いませんか。で、それをキリスト教以外の世界といえますか、キリスト教徒が大部分であるとされる欧米じゃない地域の日本に初めて出してくるわけですね。ですから一方において皆さんの方に見ていただきたいと思うし、同時にこれはきちっと管理されなければいけない。ご指摘の通りだと思っております。技術的措置とか湿度とか、更に保険とかですね、現場をどういうふうにするとか、やはり成功のためにはそういう点も全てきちっと手当てがされて、実現化される必要があると思いますので、専門家を入れないがらうまく考えて行っていたらいいというところが大事。それには尽きるとも思います。もちろん私どももお手伝いできる限り、お手伝いさせていただきます。と思っております。

池田 私は今回の「聖書展」は特に夢があるような気がします。死海写本はもちろん素晴らしいのですけれども、その保存が大変です。死海のはとりの乾燥した、しかも空気、湿度、湿度が、偶然といいましょうか、保存に最適の状況の中で二〇〇〇年間眠っていたわけです。それを外に出すことは、非常に破損や損傷につながってくるわけです。で、学者たちはこのバラバラのものを、ジグソーパズル

存、共生、そしてお互いの理解ですね。中でも宗教は他の宗教とどう折り合って行くのかという、大きな課題を突きつけられています。その問題を乗り越えなくてはならないわけですね。互いに共通項を見いだすというのはなかなか難しい。しかし、死海写本を中心とする「聖書展」に、今回本当に喜んで関わってくださった方々には、いろいろなキリスト教会や教派の方たちだけではなくて、政府の外交や文化関係の方々が大勢含まれます。さらにキリスト教の枠を越えて、ユダヤ教の人たち、イスラエル政府の人たちが、様々な要因を越えて、さっと乗ってきてくださったわけでは、私はこれは非常に歴史的なことだと思うのです。これがヨーロッパとか、お互いがキリスト教の中だけでまとまるのなら分かりますが、それとは異質な日本との関わりで、無理なお膳立てなしに関わって下さったということには非常に貴重なことです。そこから新しい対話、協力、理解が始まるでしょうし、日本の子供たちが、その素直な目で見ることによって、何かを得るでしょう。これまで日本の文人たちも一度は聖書を手にしたわけですが、その原点にこういうものがあるということを含めて、わかりやすい展示が出来れば、私は素晴らしいと思います。

司会 私も日本聖書協会のはたらきをしている者として、翻訳の苦勞などを考えますとやっぱり死海写本はその原点を指してくれているのじゃないかなと、今のお話を伺ってちょ

つと思えました。そうしますと、やっぱり死海写本から現代にまで通じてるものがあるんじゃないかなというように思っています。これは大変な準備と運営がこれからもあると思いますけれども、その点、募金のことも含めて、どのような運営を今後とも進めて行こうとされておられるのか、森実行委員長に最後にお聞きしたいと思います。

森 一つは基本的には、死海写本というものに対しての責任です。イスラエルとパチカンから貴重なものを借りるということに対する責任は、世界の宝に対する責任ですから、それに対して私たちができるかぎり責任をとらなければいけない。そのためには、どうしてもお金が必要で。今、一生懸命に私たちが協賛金とか援助とか、いろいろな形で努力しておりますが、規模からすれば、それだけ



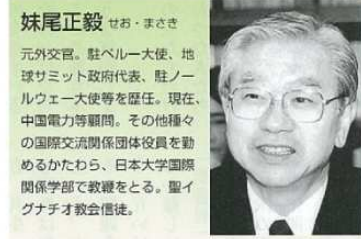
森 一弘 もり・かずひろ
東京大聖書展実行委員長
カトリック東京大司教区補佐
司教。日本カトリック司教協議会
議長カリス・ジャパン社会福祉担当司教。カトリック新聞顧問司教。財団法人真生館では、キリスト教精神に基づいた生涯学習シリーズを担当。



峯野龍弘 みねの・たつひろ
ウェスレアン・ホーリネス教会連合定例教会主管牧師。ワールド・ビジョン・ジャパン総裁。ウェスレアン・ホーリネス神学院理事長・教授。日本ケズイック・コンベンション中央委員長。著書に「愛による人間関係」(いのちのことば社)など。



池田 裕 いけだ・ゆたか
東京大聖書展顧問
筑波大学歴史・人類学系教授。エルサレム・ヘブライ大学大学院に学び、学位Ph.D取得。岩波旧約聖書訳訳委員(翻訳担当「サムエル記」「列王記」)。著書に「旧約聖書の世界」(三省堂)、「古代オリエントからの手紙」(リットン社)他。



妹尾正毅 せお・まさき
元外交官。駐ベルギー大使、地球サミット政府代表、駐ノールウェー大使等を歴任。現在、中国電力等顧問。その他種々の国際交流関係団体役員を勤める。著書に「日本と中国の国際関係」(日本放送出版協会)など。聖イグナチオ教会信徒。



渡部 信 わたべ・まこと
青山学院大学と西南学院大学の神学部、ペイラー大学大学院の宗教学部で学び、日本バプテスト連盟の牧師となる。1998年4月に日本聖書協会副総主事として迎えられ、翌年4月より総主事となる。共著に「もうひとつのキリスト教」(日本キリスト教団出版局)がある。

では十分ではないので、できるだけ多くの方々の援助をお願いせざるを得ないだろうなと思っております。：教会というのはお金が無いところで何かをすーっとやってきたという歴史がありますから、そういう意味では楽天的には考えておりますが、何とか行くだろうとは思っています。むしろ、この成果というものに期待したいものがあります。一つは、この聖書というものを軸にしながら、超教派、いろんな教派が一緒になって協力するという実績を残すということは、将来のために非常に大きな希望になるんじゃないでしょうか。私たちが「聖書」という根っこに触れていくということでは、それぞれの教派の持つ異なる教義とかイデオロギーを超えたいというのが、共通項を見いだせるのじゃないかというのが、一つあるんです。それからもう一つは、今、

日本の社会には、「宗教に対する飢え渴き」というのがありますね。しかし今までの、少し組織体となった共同体に対しての拒絶反応があるわけですね。カトリックなんかもそうです。大きな、何かを持ち過ぎちゃっているものから、若い人が飢えていても来れない。そういう意味で聖書の持つ「イナミズム」というのを、こういう聖書展を通して紹介することができれば、日本の社会に何らかの貢献ができるんじゃないかなと、そういう意味での成果を期待しています。司会 本日はお忙しい中、皆さんありがとうございます。今回、このようにして「東京大聖書展」を行うことになりましたけれども、十一月の「東京大聖書展」に向かって、共に折り合いながら、準備して行きたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

二〇〇〇年はキリスト教徒にとって大聖年であると同時に、ドイツでは活版印刷術によって聖書を初めて印刷したヨハン・グーテンベルク生誕六〇〇年を祝う二重の喜びとなる。彼が生まれ、四行聖書を印刷したメインツでは、誕生日(とされる)六月二十四日を中心に祝賀行事が行われる。慶應義塾大学HUMIプロジェクトは七月初旬の国際学会で、大英図書館と共同で、四行聖書に関するデジタル・プレゼンテーションを行う予定である。過去千年間で世界に起こったことも重要な出来事は、グーテンベルクの活版印刷による聖書の出版だったことは、欧米の雑誌の各種アンケート結果でも明らかである。

慶應が所蔵する四行聖書は、アメリカのエステラ・ドヒニ夫人が所有していたもので、上巻(旧約聖書)しか伝わっていないが、印刷、手書き装飾、製本がいずれもメインツで行われた現存本三部の一つとして価値が高い。敬虔なカトリック信徒だったドヒニ夫人は、夫と共にカリフォルニアに神学校を設立、夫亡き後は四行聖書を含む膨大な蔵書を寄贈した。蔵書は二十五年間は図書館から動かさぬように、その後は神学校の経営のために売却してもよいという条件付きだった。四半世紀が過ぎて、神学校はパチカンの許可をとりつけて、一九八七年から蔵書を競売に付した。四行聖書を落札したのは日本橋丸善だったが、九年後に慶應の所蔵に帰した。

四行聖書は、最初赤と黒の二色印刷が試みられたが、ほどなく黒インクによる印刷のみとなり、各書の最初と最後の文、装飾文字や欄外標題、文頭の文字の朱書きなどは、印刷後に手書きで加えられた。これこそ、それまで長く続いた写本メディアと印刷メディア

グーテンベルク四行聖書とHUMIプロジェクト

高宮利行 慶應義塾大学文学部教授・HUMIプロジェクト主事



が合体した中世のマルチメディアと呼ばれるゆえんである。百八十部ほど印刷されたらしいが、全世界に四十七部現存するといわれてきた。昨今でも端本が発見されており、五十三部という数も出ている。その書誌学的研究は十九世紀末からドイツを中心に行われてきたが、その研究成果をデジタル書物学の立場で再検討しようというのが、四行聖書の架蔵と同時に慶應で始まったHUMIプロジェクトである。HUMI(Humanities Media Interface)とは、日本語のふみ「文、典、史」との語呂合わせもあるが、コンピュータを用いて双方向性を保ちながら研究しようとする姿勢を示している。実際には、高精細のデジタルカメラを用いて撮影した四行聖書をはじめとする稀覯書の全ページをコンピュータ画面上で画像処理をして、印刷文化に関する諸問題を解決すると同時に、デジタル画像をインターネット上(<http://www.humikyo.ac.jp>)で配信することを目的とする。このやり方ならば、貴重な文化遺産を傷つけないで次世代に送り、研究者にはコンピュータ上でいくらでも資料として用いることができるという、一挙両得を狙ったものであった。幸いにも、国家機関やコンソーシアム企業からの資金的・技術的な援助を受けて、研究は着々と進んでいる。HUMIプロジェクトの当面の目標の一つは、現存する四行聖書のデジタル画像をできるだけ多く集積することである。印刷された本文は皆同じはずだという考えは、現代の印刷本にしか当てはまらない。一八〇〇年以前の手引き印刷機時代には、印刷された書物が完全に同じ本文をもつものは二部として現存しなかつたことは、書誌学の常識である。そこに見られる相違から印刷の諸事情を分析するために、十九世紀末に

生まれたのが書誌学という学問であった。HUMIでは、既に四二聖書の慶應本（上巻）、ケンブリッジ本（上下巻）、マインツ本（上下巻と下巻）のデジタル化に成功した。三月には大英図書館本（上下巻二セット）を撮影する予定である。撮影技術の改良により、現在では上下巻合わせて約二〇〇ページを四日でデジタル撮影することが可能となった。十名もの撮影及びコンピュータへのバックアップ要員を外国の図書館に送る経費のことを考えれば、このスビードは何にも代え難いメリットとなっている。

このように、HUMIが四二行聖書に取り組み関心はその神学的な内容ではなく、デジタル書物学の測定原



器としての役割である。グーテンベルクは、活版印刷術という最も重要な発明を西洋文明にもたらし、メディア革命を引き起こした。その基礎条件として油性の印刷インク、鉛合金の鑄造可動活字、印刷プレスを用いて、成功した。拡大されたデジタル画像を用いて、いったいどういったインク成分なのか、鉛合金の成分は、また一度に何台の印刷プレスが稼働したのか、手漉き紙の成分とその調達先はどこか、出来上がった書物の輸送手段はいかなるものだったかなど、HUMIの関心は書物学から十五世紀の社会文化史へと広がっている（詳しくは拙著『グーテンベルクの謎』岩波書店を参照されたい）。

台湾震災リポート



台湾聖書協会のライ総主事と配布された聖書

一九九九年九月二十一日午前一時四十七分、マグニチュード7.6の大地震が台湾を襲いました。十五日には台湾聖書協会から震災被害についての詳細な報告と支援要請があり、それに応じて、十月十四日に日本聖書協会スタッフ一名が台湾へ向かい、震災義援金を台湾聖書協会に届けました。被災地を訪問してきたライ総主事に、被災地の教会やクリスチャンの状況、震災時における聖書協会の働きについて語っていただきました。

キリスト教会の被害はどうでしたか？

七十二の教会が被害を受けました。ある教会は完全に崩壊し、ある教会は屋根が半分崩れ、柱が折れたり。被害にあったクリスチャンの数ははっきりとはわかっていませんが、少なくとも一万人以上だと思います。そのほとんどが少数民族です。

このような緊急時に聖書協会としてのどのような活動を行っていますか？

台湾全土に約三千の教会があり、そのうち長老派は台湾で最も大きな教派で、千三百の教会

があります。台湾聖書協会は創立当初から長老教会から多大な支援を受けていて、活動のほとんどがそこを通じて行われています。ですから、今回も私たちは長老教会と協力して聖書を供給する予定で、被災地で教会ごとに必要な聖書の冊数を調べて私たちに教えてくれることになっています。私たちは被災地に直接行って百冊差上げましょうなどとは言いません。もしそのようにしたら、救援物資と同じ事態となります。ある地域では余ほどの物資、他の地域では全く物が無いという状況が実際生じています。

被災地での必要な聖書の冊数がわかり次第、頒布活動を始めるというわけですね？

来週わかるということですが、ある人々は「今聖書を配るのはよしたほうがいい。彼らはまだ家がないのだから。」と言います。被災地の人々は聖書を置いておく場所がないのです。もうすぐ雨季がやってきて、すべてが流れ去ってしまいます。一つのテントには二人の人間が寝る場所と衣類を入れる小さな袋を置く場所しかないのです。人々が簡易住宅に移ったときに聖書を配布する時期かもしれません。それまで約一ヶ月以上かかるでしょう。私が被災地を訪れたとき、長老教会と協力関係のない幾つかの教派を見かけました。彼らはすでに新約聖書や御言葉パンフレットを被災地で配りましたが、置く場所がないので捨てられています。ですから、私は今すぐ聖書を配布しようとは考えていません。今このとき、クリスチャンにとって聖

書は非常に価値あるものですが、ノンクリスチャンにとってはただの分厚い本に過ぎないので。彼らは今現在聖書を必要としておらず、また誰も御言葉を彼らに説明してくれないのです。ですから、私たちは聖書をただ配るだけでなく、何かしなければいけないと感じています。聖書配布に関しては、始めに教会に配る予定です。教会は立ち上げられる力を十分に持っていますし、教員やノンクリスチャンをサポートする力があるからです。

被災地の教会では現在どのように日曜礼拝と祈禱会が行われていますか？

ある教会は学校などの建物を使っています。また屋外で礼拝をするところもあります。地震からまだ三週間しかたっていないので、もちろん椅子もありません。祈禱会や家庭礼拝は被害を免れた家などで行われています。しかし、実際は祈り以外の公式の集会は持たれていないということです。集会とは、今は家々の片付けを手伝うことを意味しています。日曜礼拝を除いて、他の集会はキャンセルになっています。もし三人が家に集まれば、彼らは祈ります。二分間祈禱を！それが終わると、じゃあ働こうとなるわけです。私が被災地の教会を訪れたとき、牧師や牧師夫人は疲れきっていました。彼らのものに連日多くの取材者が来て、みな同じ質問をするのでその度に同じ答えをしなければならぬからでした。牧師から聞いたのですが、ある人がその牧師の教会を訪ねてきてこう言ったそう

★今回、台湾聖書協会に贈った義援金七十万円は全て被災地での聖書無料配布（一九九九年十一月末から）に用いられています。

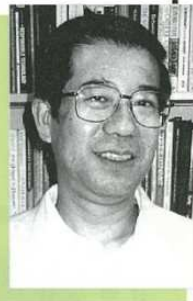
聖書協会の働きにご参加を

今後も折に触れて、各国の聖書協会の働きをご報告いたします。日本では95年の阪神淡路大震災の際に、全国の皆様からのご献金により、251教会、76学校へ、聖書および新約聖書を合計16,927冊お届けすることができましたが、今回お伝えしました台湾の場合も、文中の言葉どおり「人々の霊的生活」を支える力として、神の言葉が配布されました。こうした緊急を要する働きが滞ることなく進められるためにも、さらに多くの皆様に、世界の聖書協会の働きにご参加いただければ幸いです。ご家族、ご友人をお誘いください。詳しくは広報/募金部がお案内いたします。(TEL.03-3567-1980)

物語の神学 の可能性

東方敬信

青山学院大学教授
著書に『リチャード・ニーバーの
神学』（日本キリスト教団出版局）、
『物語の神学とキリスト教倫理』
（教文館）などがある。



聖書の読み方としての物語

物語の神学のきっかけをつくった「聖書物語の蝕」を記したハンス・フライは、聖書と教義学の対立を克服して聖書を現実的物語 (realistic narrative) として読むことを勧める。それは、読者が自分の人生を聖書という大きな物語に位置付けてリアリティーを得る方法である。福音書物語は、私たちが人生のエピソードを紹介して自己同一性を物語るように「イエスの自己同一性」を語っている。それが、荒野の誘惑やヨハネの洗礼であり、神の国の宣教や譬えや倫理的教え、また十字架と復活である。そこに神の愛の自己同一性を語るのである。しかも、その物語は、主イエスの地上の旅路という大きな物語に参加する弟子たちの物語をも語る。それが召命の出来事や愛の教えや仕える生活への価値観転換などである。

物語の織り合せ

イエスの旅路に参加した弟子たちのように、私たちも聖書物語に参加するのが自分の物語

を「織り合わせる (interlace)」ことである。その例として、デンマークの女流作家イサク・テイーネセンの『パベットの晩餐会』(ビデオ有り) をみよう。

ノールウエーの高山の間にあるベアレヴォーという海岸に禁欲的キリスト教共同体があった。創始者の娘マルチヌとフィリップと助手のパベットが主人公である。この信仰共同体の人々は、「この世の快樂を悪とみなして断わっていた。」パベットは、料理が得意であったが、ある人に紹介されてベアレヴォーにやってきた。このパベットに富くじが当たる事件が生じたが、彼女は姉妹の父親の記念日にフランス料理を作らせて欲しい願う。姉妹は、良い顔をしなかったが、パベットの申し出を受け入れた。すると、パベットの顔はこれまでになく明るくなり若いころの美しさを取り戻した。喜びが表情と身体に明るさを与えたのである。

さて、招待された人たちは、十二人となった。まさに十二弟子である。台所でパベットは黙々とフランス料理に精を出す。作者デイナーネセンは、「みんなが食事のテーブルについていたそのときの様子は、あのガリラヤの町カナで婚礼の席に着いた人びとさながらだった。」という一節を入れるのを忘れなかった。

ベアレヴォーの素材で無口な老人たちは、いがみ合いの気分をかえられ、教し合いの気分になった。この不思議なパベットの晩餐会は、誰もが普段と違う気分を味わい、「覚えているのは、その部屋が神々しい光に溢れ、いくつもの小さな輪光が混じり合って、ひとつの大きな燦然とした輝きになっているように思えたことだけだった。」と美しく描かれている。その晩餐会が終わって、客たちが外に出ると、真っ白な雪が積もって「まるで自分たちの罪を羊毛のような白い雪で清められたようだった。その新しい無垢の衣をまとって、彼らは子羊のように跳んだりはねたりした。」これによって、私たちが新しい共同体の喜びを知らされるのである。

最後に、デイナーネセンは、偉大な芸術家パベットに焦点を当てる。姉妹がパベットの自

己犠牲をたたえようとすると、ささざるように彼女は話し始めた。彼女は、バリの革命派であったことを告白し、今や敵味方を越えて、夫や息子を殺したガリフェ將軍などにも最高の料理を出したかったという。またパベットは、自己犠牲より、喜んで料理した芸術であったと主張する。「芸術家の心には、自分に最善をつくさせてほしい、その機会を与えてほしいという」願いがあると言う。

この「パベットの晩餐会」は、料理の天才である女性パベットによって主イエスの晩餐をイメージした。そうすると、第一に、主イエスは、愛の救い主であるが、自己否定の犠牲というより、喜びの表現として奉仕したことになる。第二に、主イエスは、あらゆる二元論を打ち破られた。肉体を軽蔑して精神を重んじる禁欲的二元論を打破された。カナの

婚宴という聖書は、その事実を伝える。さらに敵味方の二元論をこえられた。そこにあるのは、大きな救いの愛という福音の力である。第三に、このイメージは、奉仕する者の勝利を示す。「彼女は、高い信頼を受けている召使という風貌を持つようになった。またときは乞食のような服装だった。ところがいまでは征服者の趣をみせていた」とある。主イエスは、仕える勝利者としてわたしたちを奉仕に招くのである。

このように物語は、教義を易しく説明するというより、それによってしか実現できない生活世界を経験させてくれる。別の言葉でいえば、聖書解釈は、物語のリアルな力を今起っていることとして経験させることである。私たちが、このような意味で聖書を力強い平和と希望の物語として読むことができるのである。

東京大聖書展の実行委員会委員会の要請を受け、昨年十一月、展示物用のためパチカン図書館を訪れる機会を得ました。パチカン図書館はサンビエト寺院の向かって右側の建物内にあります。パチカン滞在中の和田誠神父がイタリア語の通訳の勞をとってくださり、館長のフアリナ長官と無事お会いすることができました。フアリナ長官はパチカン市民で、その建物内で生活されています。ご厚意に

より訪問日を休館日に設定し、私一人のために広い図書館を懇切丁寧に紹介くださったのです。初代カトリック教会時代からの聖書類の蔵書は八万冊にも上り、幅二百メートルもの壮麗な図書棚は先は見えませんが、何重にも何重にもあります。一冊一冊手にとりながら写本研究がなされているのだそうです。地下には門外不出の貴重な聖書を所蔵する書庫が

メール

パチカン図書館訪問記

渡部 信
日本聖書協会総主事

厳重に管理されていて、過去に二三枚の写本が紛失した時も、当時の出入庫の記録によって無事回収できたことだ。さて今回「東京大聖書展」のために五本の貴重な聖書を借用することになりました。一番古いものは紀元五世紀のラテン語旧約聖書 (Vat. lat. 3281) です。そして日本最古の現存する部分訳聖書で、ローマ字で日本語に訳された福音書抄のバレット写本 (Reg.

lat. 56)。後者はイエスス会宣教師バレットが一五九〇年に来日した際に写したもので、一九四〇年にパチカン図書館で発見されました。パチカン図書館ではファクシミリ版写本も作成中で、四世紀のバチカン写本 (Vat. gr. 1208) のファクシミリ版もお借りできました。是非、東京大聖書展にご来場いただきご覧ください。と思いま

〈ななちゃん〉の手紙 小笹和彦

「・・・ Paul Gerhardtの Geistliche Lieder という文庫本を見つけました。彼の百三十余編におよぶ宗教詩の中から代表的なものを集めた詩集です。自分の意志で買ったのはこれが初めてで、今、少しずつ読んでいますが、ドイツ語の詩でこんなに夢中になって読み、こんなに感動するのは、恥ずかしながら独文四年次にして初めてです。詩がただの単語の羅列としてではなく、パワーを持ったことばとして目に映り、心に入ってくる、という経験はしたことがなかったので、自分でもびっくりしています。(中略)。Gerhardtの詩を原文で読めるだけでも、ここまでドイツ語を勉強したかいたがあった、と思えるくらい、今興奮しています・・・」。

〈ななちゃん〉ありがとう、そしておめでとう。ドイツに留学して本当によかったね。パウエル・ゲルハルトの詩に熱中している姿を想像するのは楽しい。きっときれいに輝いておられることでしょう。十七世紀ドイツの詩が未だに生氣を保ち、それが現代日本の青年にも深い感動をもたせて迎えられたことを知って感激しています。そして、そうした目覚めた個人と共に合唱することができ喜びを、今私は改めてかみしめています。

思えば九八年の受難節に、日本聖書協会の創立一二五周年を記念するチャリティー・コンサートで、パッハの〈マタイ受難曲〉を取り上げたのがきっかけでした。あの時は、〈ななちゃん〉より一足先にケルンに行った〈ななちゃん〉が中心になって、〈マタイ勉強会〉が開かれました。福音書そのもの、パッハの音楽、時代背景、対訳などの勉強が熱心に進められたことを懐かしく思い出します。一年間、皆が夢中になって学んだ成果もあり、場所を変えて二回連続で開催したコンサートはいずれも感動の嵐を呼びました。聴衆の方々に好評を頂きましたが、より強い感銘を与えられたのはむしろ私たち、演奏した側ではなかったかと思えます。君が渡独早々にゲルハルト詩集を手にしたのもその余韻でしょう。

古くからのことわざに「よく歌う人は倍祈ることになる」とありますが、君もそういう境地に浸りつつあるのでしょうか。詩を読みながら、ふとあの「血しおしたたる(讚美歌21第三二一番)」の旋律が頭をよぎりませんか。パッハが〈マタイ〉のかなめに用いたあの曲です。ある意味で、その時君は「倍祈っている」ことになるのかもしれない。君自身の想いがゲルハルトの原詩に、そしてその詩に触発されたパッハの曲想に重ね合わされていくのです。ゲルハルトの詩はシトー会修道院の受難週(の祈りを底本としているので、想いはさらに中世の観想修道会や使徒たち、そして十字架の下にたたずむ聖母マリアの痛みにさかのぼり、その人々と共に魂の重奏を奏することもできるでしょう。そこに宗教音楽を演奏する者の喜びがあります。時代を飛び、国境を越えて私たちは一つになることができます。あらゆる人々が一点に集中して声を合わせ、共鳴することができのです。

練習を積み、歌詞の発音や意味を学ぶのは、かなり長い苦勞を伴う修行です。そしてその成果は、おおむね一回の演奏で跡形もなく消えてしまいます。ある人はその過程を楽しむのかもしれませんが、またある人は、その一回性を貴重なものとして心に留めるでしょう。けれどもその本当の喜びは、演奏会の興奮の後に残ったものではないでしょうか。それは心の中に徐々に蓄積され、発酵し、やがて芳香を放ちながら新たな希望を生みます。それこそ「私は常に待ち望み、繰り返し、あなたを讚美します(詩編七一・二四)」と歌った、詩人の魂にこだまする生き方です。

今年(2015年)はパッハ没後二五〇年の記念すべき年。勉強も大変でしょうが、しっかりと本場のパッハに接してきてください。それも、名演奏家や大演奏会を聴くばかりではなく、郊外のひなびた教会で、子どもからおじいちゃんやおばあちゃん(の混じる聖歌隊に加わり、一緒に歌ってみてください)。そうした日常化されたパッハ、歌う者の骨肉と化したゲルハルト等の詞こそ、人から人へと引き継がれていくものの中で最も大切なものだと思います。

〈ななちゃん〉。どうかその貴重な遺産を受け継いできてください。例えわずかでも、それは人の生き方や日本の文化を変えていくだけの力を秘めています。皆で大切に育てましょう。ご活躍を祈ります。



小笹和彦(おざさ かずひこ)

教会音楽の演奏団体「東京スコラ・カントーラム」創立者の一人。創立以来20年、水準の高いチャリティー・コンサートを主催し、その収益をすべて社会福祉団体に捧げている。音楽評論家、翻訳家。

田中正造の聖書

鈴木範久

立教大学教授

足尾鉍毒反対運動に一生をささげた田中正造は、一九一三（大正二）年九月四日、谷中村へ帰る途中、病気で倒れ、栃木県吾妻村の庭田清四郎の家で苦闘の生涯を閉じた。七十三歳であった。まくらもとは、首にかけ持ち歩いていた黒い袋が置かれてあった。中を開くと、手帳、聖書、鼻紙、石ころ数個が出てきた。

聖書は、『新約全書』一冊と、帝国憲法とともに白糸で綴じ合わせた『マタイ伝』一冊との二冊とされている。田中の遺品として今日残されている聖書を見ると、前者は大日本聖書館発行の『引照 新約聖書』（二八九九）であり、後者は米國聖書会社発行の『新約聖書馬太伝』（一九〇四）である。

田中正造は、死に至るまで聖書を肌身離さず持ち歩いていた。しかし最初から聖書に親しんだわけではない。社会の変革にまして聖書を読む内村鑑三に向かい、「今は聖書を棄て起つ時」と叫んでいた時期もあった。

田中が初めて聖書に接したのは一九〇二年の獄中であった。鉍毒被害農民の裁判を傍聴に行きあくびをしたため、いわゆる官吏侮辱罪に問われて下獄した四十日の間である。田中は差し入れられた聖書を読み「心機一転」を経験する。この聖書を差し入れた人物につき、田中のもっとも身近にいた島田宗三は、それは内村鑑三であると言っている。遺品の聖書の刊年から推して、この聖書が一九九九

年刊行の『引照 新約全書』の可能性もある。その後、田中は新井奥達をたずねては、その聖書講義に耳を傾けるようになる。田中の聖書理解には新井奥達の与えた影響が大きい。

聖書が田中に与えた影響は、まず日露戦争を前にして軍備全廃論となつてあらわれる。これは、その後の谷中村に住み込む鉍毒反対運動において無抵抗の抵抗の態度をとらせる。田中の好んだ聖句として「人はパンのみにて生るものにあらず」（マタイ四・四）がある。すなわち鉍毒被害者との共同生活を通じて、人間が生きるためには衣食住だけで足りるのではなく、「パン」をこえるものの大切さを感じたことによる。田中はまた、「今日は今日」の思想をキリストの教えとみている。これは「明日のことをおもひわづらふなかれ」（マタイ六・三四）によるのであろうか。眼前の現実から目をそらさず、直視して生きることと理解している。こういうキリスト教の思想が、田中にとつては仏教との相違とみられたのであろう。これらのことから、田中にとり聖書は、みずから語るように「聖書は読むにあらざ、行ふものなればなり」との実践的な教えであった。だが、聖書から、田中は

しだいに次のような面も学んでいたことを記しておきたい。遺品から見出された聖書は、前述したように二種類である。そのうちの『引照 新約全書』には次の部分に傍点が付されている。

此マリアよりキリストと称るイエス生れ給ひき 其世系を数ればアブラハムよりダビデに至るまで十四代ダビデよりバビロンに徙ざる、時まで十四代バビロンに徙されしよりキリストまで十四代なり それイエスキリストの生れ給ること左の如し

これはマタイ伝一章一六節〜一八節で



田中正造（1912年10月）
（岩波書店「田中正造」第1巻）より

ある。この部分に傍線をほどこした理由がよくわからない。

さらに次の部分には朱線が引かれている。天に在ます我儕の父よ願くは爾名を尊崇させ給へ 爾國を臨らせ給へ爾旨の天に成ごとく地にも成せ給へ 我儕の日用の糧を今日も与たまへ 我儕に負債ある者を我儕がゆるす如く我儕の負債を免たまへ我儕を試探に遇せず悪より拯出し給へ

これは、いうまでもなくキリストが祈りのモデルとして示したマタイ伝六章九〜一三節の言葉である。朱線がいつ引かれたものか明らかでないが、ここには神の国の地上での実現と到来が祈られている。それとともに、「われらのおひめ」に對するゆるしが請われている。

田中が聖書とともに遺品として残した手帳の日記には、死の床に臥す前日の八月二日、悪魔ヲ退クルノ力ナキハ其身亦悪魔ナレバ也 コ、ニ於テカ懺悔洗礼ヲ要スと書かれていた。これが絶筆である。

足尾鉍毒反対運動は、もとより古河市兵衛や明治政府という悪魔へのたたかいであった。しかし、しだいに田中は、被



遺品の『引照 新約聖書』
（佐野市郷土博物館）

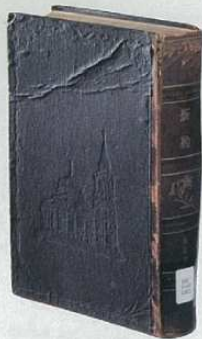
害者農民の間にも、反対運動の同志の間にも、同じ悪魔の跳梁を、いやというほど見せつけられたにちがいない。そしてその悪魔が、自己自身の内部にも深く巣くっていることを知り、それに対する「懺悔洗礼」を痛感していたのである。田中正造は、最後まで鉍毒反対運動の現場に帰ろうとして息絶えた。このことから聖書は鉍毒反対運動と矛盾するものとは受け取られていない。むしろ、それに深い確信を与えた。それとともに、運動する側の人間の心内部の「おひめ」の「懺悔洗礼」をもあわせた次元へと、新しい方向を切り開かせていったと言つてよい。

聖書図書館蔵書シリーズ—⑬

ニコライ訳

『我主イイス ハリストスノ新約』

東京 1901年刊
縦:22.8cm 横:15.0cm



日本正教會翻譯
我主イイス
ハリストスノ
新約
一千九百一年 東京 正教會本會印行

ニコライはロシア正教会の最初の宣教師として1861年来日、函館領事館付司祭となった。日本の歴史、文学、宗教や日本語を8年間にわたって研究し、宣教を始めた。1870年に日本正教ミッションを開設、72年には東京・駿河台に宣教の中心を移した。また青年聖職者の育成のため「伝教学校」を設立し、後にその一部は「正教神学校」となる。

1872年頃から聖書や聖典の日本語版の出版に努めていたが、1901年に中井木菟麿の協力を得て、ギリシア語原典から新約聖書を翻訳し、出版した。1891年には通称「ニコライ堂」と呼ばれる大聖堂を建立している。

読者の声より

このコーナーではSOWERのアンケートにご記入いただいた読者の皆さまの声、さらに『聖書』の読者の声をご紹介します。聖書協会に、点字聖書のご注文やお便りを点字でいただくことがあります。今回は点字でいただきましたお手紙を墨字でご紹介したいと思います。

●口語訳聖書全巻をご注文いただいた方から

「…先日は口語訳聖書をお送りいただきありがとうございました。早速読ませていただいております。墨字の聖書を持っていたのですが、視力が弱くルーペを買って苦労して読んでおりました。点

字の聖書をお送りいただいてから、聖書を読むのがこんなに楽しいものだったのかと思いました。もっと早くお願いしておけばよかったと思っています。本当にありがとうございました。」

●新共同訳聖書全巻をご注文いただいた方から

「点字本販売していますか。販売は分冊でもよいのでしょうか。もし分冊でも販売していただけますなら…（中略）なぜ分冊が必要かの理由ですが、こちらへ転居してこの教会の礼拝に出席をしましたら新共同訳を使用しています。そして交読文として詩編を交読していますので、早急に必要です。」

家庭奉仕員に記入してもらってから、献金により安く買えることを知りました。また覚えて祈らせていただきます。」

とのお手紙をいただき、お送りしましたら、お礼状をいただきました。

点字のお手紙は、「点訳のしおり」を見ながら一字一字読んでおられますが、このようなお礼のお手紙をいただきますと「より多くの方々にできる限り同じ条件で聖書をお届けすること」の大切さを感じます。点字聖書（新共同訳 旧約聖書 続編つき）の製作費は全巻約76,000円かかることを、全巻約4,000円で頒布しております。製作費の不足分を補うための皆さまからのご支援を、心から感謝申し上げます。

「お礼 この度はわがままなお願いをいたしました。早々に聖書を送っていただき感謝です。早速礼拝に持参できます。なお、赤色振替用紙に1,000円と

Readers' Voice

◆ ソファは、会員のための情報誌です。購読して
お読みになりたい方は、後援会・維持会に
加入ください。
● ソファ 第16号 MARCH 2000
発行 財団法人 日本聖書協会
〒104-0061
東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-35671198
FAX 03-35671436
ホムページ <http://www.bible.or.jp>
振替 0016000118410
委託イラスレーション 月本伴美
デザイン 株式会社デザイン・イン・スタイル
印刷 川文閣印刷株式会社

編集後記
SOWER 16号をお届けします。特集の座談
会は、常に話題性スケジュールにある方ばかりに、奇跡的に正月明け五日の夕刻にお集まりいただいたて開かれました。そしてその直後に、東京大聖書展が今年十一月一日（十九日）まで開催されることになりました。座談会でも何度も話されておりますが、この聖書展の大きさを自覚して、初めて日本に於ける「死海写本」が会場に展示され、日本が前年の福音書の末葉に記されていたものと変わりました。これは、イストラエリヤの買出しに聖書に関する事情によりあり。
キリスト降誕二〇〇〇年を迎うハイイベントとして、人的にも経済的にも過去の聖書展よりも教壇の輝けとなりつつあるこの東京大聖書展のために、どうお祈りください。そして期待してご来場ください。この機会に多くの方が新たに神のご呼ばれに出会ふことができると願っています。次号ではさらに詳しく出版動向のご紹介を予定しています。(S)